

韓国の新聞記事からみる高松塚古墳総合学術調査と韓半島における考古学交流

—「一本の歴史」を夢見る「民族」の異床同夢—

扈 素妍

I はじめに

1972年3月、明日香村史編纂のために調査を依嘱されていた奈良県立橿原考古学研究所によって発掘された¹高松塚古墳での壁画発見²は、日本で「世紀の発見」として大きくスクープ報道され、日本社会に古代史に対する期待を抱かせた。この出来事は、日本のみならず、韓国でも大々的に報道され、考古学界にも影響を及ぼしたと考えられる。また、韓半島においては、韓国の考古学界のみならず、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北韓）の考古学界にも影響を与えたと考えられる。

高松塚古墳壁画に関する研究は、文化財保護体制の確立の契機となるとともに、被葬者論や画法など古代美術史をはじめとする様々な研究分野に多大な影響を与えた。さらに、1972年に、壁画が発見された当時の日本メディアを分析対象として、壁画発見という出来事が如何に日本社会へ拡散したのかを検討したものがある³。小川伸彦は同じく、同時期のメディアにおける報道記事を分析して、それまで「存在が知られてなかった過去のモノ」が、メディアを通じて如何なる価値やイメージと結び付いて社会に流布されたのかを研究した⁴。これらの研究によって、当時新聞報道の様子が概観され、記事の内容が「さまざまな言説上の技法が駆使されることによって、徐々にナショナルなものになって」⁵いったことが明らかになった。

しかし、高松塚古墳壁画の発見と「高松塚古墳総合学術調査会」（以下、総合調査会）へ南北韓学者が参加したことが、韓半島の政治状況下でいかに受け入れられたのか、また、それが南北韓の学術交流にはどのような影響を及ぼしたのかについては未だ論じられていない。そのため、本稿では、当時、高松塚古墳壁画の発見という出来事が、韓国においてはどのような価値と結び付いて、いかなる意義を持つ出来事として報道されたのか、また、それが南北韓の考古学界の交流にはどのような影響を与えたのかを検討する。ただし、当時の北韓新聞を確認することができなかつたため、本稿の分析対象は主に韓国新聞となることをあらかじめお断りしておきたい。

※本文で取り上げた新聞記事は全て韓国・朝鮮語原文を筆者が適宜日本語で訳した。

II 韓国の新聞における高松塚古墳壁画の発見に対する記事

ここでは、総合調査会に参加した南北韓の学者に関する記事を論ずる前提として、まずは、高松塚古墳壁画発見に対する韓国における新聞記事の様子を概観する。〈表1〉は1972年、高松塚古墳の壁画発見に関する新聞記事を、「NAVER NEWS LIBRARY」での検索を通じて整理したものである。この表からもうかがえるように、高松塚古墳の壁画発見は韓国においても大きく報道され、多くの関心が寄せられた出来事であった。それでは、その関心の核心には何があつただろうか。その関心の理由を確認しながら、考古学における南北間のはじめての考古学における接觸について考察してみたい。

1972年、韓国における高松塚古墳の壁画発見に関する79記事の中で、総合調査会へ北韓学者が参加することが報道された9月から、韓国学者が韓国へ帰国した10月末までの記事が44本ある。関連記事の件数から、社会の関心を図ることは難しいが、少なくとも、10月の総合調査会に関する記事は新聞の一面を飾ったり、文化面の一面を全部占めたりしていたことから、新聞社がこのテーマを重要なものとして取り扱い、韓国社会で注目されていたと評価できるだろう。

各記事の内容を確認したところ、「高句麗」「韓国系」「民族」「南北」が重要キーワードになっていることが分かった。まず、「高句麗」がタイトルに入っている記事は14記事である。内容まで検討すると、「高句麗」が重要に扱われる記事はより多いが、その主旨は、「今まで百濟文化の影響だけを受けたと知られている」日本古代文化には「高句麗をはじめとする韓半島全域の優秀な文化が」影響を及ぼしたことが壁画発見によって「証明」されたということ⁶である。また、壁画の画工は「高句麗出身の『黃文本實』が最も有力であるという主張」が「奈良」県「橿原」考古学研究所の「井上氏の発表」であった⁷ことなど⁸、高松塚古墳壁画に対する高句麗の影響を強調するのみならず、ひいては「日本古代文化」への影響が確認できたという記事もあった。

そして、総合調査会が開催された時からは、北韓側が壁画を「高句麗の影響を強く反映している」⁹ものであり、「高句麗の直接影響を受けた高句麗系の産物」¹⁰として見ていることと、それに比べて韓国学者は「高句麗の影響と中国文化、土着化した日本文化の三つが複合されたもの」¹¹で、「高松」古墳壁画は東「アジア」文化の様々な要素が複合されたものであって、同時に日本固有の文化の芽生え」¹²として評価する見解を明かしたことに戸報道は集中されている。一方、日本人学者の中には、高松塚への影響について「高句麗」のみならず、三国の影響を否定し、唐からの影響に限定したものもいるという内容や、日本画師が書いたなどの主張があることを伝える内容の記事が散見できる¹³。また、そのような日本人学者の論については、後に総合調査会に参加する金元龍の意見として、「日本

表1 「高松塚古墳壁画」の発見に関する1972年の韓国新聞記事一覧

タイトル	新聞名	日付
七、八世紀갓一基 日나라縣서 高句麗人 고분發見	『東亜日報』	1972.03.27
日考古學者 "百年에 한번 있을成果"	『東亜日報』	1972.03.28
日本깊숙히 파고든 七色의極彩 高句麗의 빛 古墳 壁畫	『東亜日報』	1972.03.29
"高句麗文化가 花피운 小宇宙" 日本人学者들이 본 나라縣 고분壁畫	『東亜日報』	1972.04.03
日아스까고분金製장식 唐代의 「寶相華文」사용	『東亜日報』	1972.04.04
日서 또韓國系壁画 발견	『朝鮮日報』	1972.04.04
"고분壁畫등 研究위해 中共·北傀에協助요청"	『東亜日報』	1972.04.21
東京文化財 研究所長 세끼노博士 "韓國文化財보호는 先親의 遺業계승"	『東亜日報』	1972.04.24
日서結論단계 아스까發掘고분壁畫 高句麗畫家가그린것	『東亜日報』	1972.05.03
스케치 日다까마쓰총 고분발굴 계기로 韓國文化에關心	『東亜日報』	1972.05.24
構造·塗料분석·畫工의 人的關係가 立證 朝日新聞보도	『東亜日報』	1972.05.27
日文部省 다까마쓰 쓰가 고분共同研究위해 北傀학자招請추진	『東亜日報』	1972.05.31
李瀨駐日大使對日항의 朝聯教員再入國허가등	『東亜日報』	1972.06.08
日에 또 高句麗 壁画	『朝鮮日報』	1972.06.09
日高松塚發見者 網干 조교수 來韓	『朝鮮日報』	1972.07.11
"韓國 古文化에 놀라운關心" 金元龍박사가 말하는 日本 考古學界	『朝鮮日報』	1972.07.12
壁畫복사商品 날개돋치자 住民들版權주장	『東亜日報』	1972.07.12
▲日本「アスカ」村「だ까ま쓰」塚에 대한 학술발표회	『京鄉新聞』	1972.07.18
「다까마쓰」총源流찾으려온 日아보시教授 "棺의 장식무늬와 慶州의 옛 기와 무늬가같아 한系列로 심증얻어"	『東亜日報』	1972.07.19
古代日本文化 源流는 韓國	『京鄉新聞』	1972.07.19
日 아스까 古墳韓國영향 분명	『朝鮮日報』	1972.07.20
文化	『京鄉新聞』	1972.08.30
北韓學者 내월日本과견 다까마쓰古墳調査위해	『東亜日報』	1972.09.07
日 文化廳 다까마쓰 고분 學術調查 南北學者네명씩招請	『東亜日報』	1972.09.15
「다까마쓰」고분은 刑部親王의 陵墓	『東亜日報』	1972.09.18
顏料퇴색여부 調査	『朝鮮日報』	1972.09.26
北韓 經濟人團-考古학자 日서 入國허가	『朝鮮日報』	1972.09.26
北韓經濟人團 入國허가	『京鄉新聞』	1972.09.26
北韓經濟使節-考古學者에 日서 入國허가	『東亜日報』	1972.09.26
北韓學者 4 명 日本到着	『朝鮮日報』	1972.09.30
萬物相	『朝鮮日報』	1972.10.04
다까마쓰 고분 종합調査 本格化	『東亜日報』	1972.10.04
아스카古墳 조사 南北韓學者 8 명	『毎日經濟』	1972.10.05
"北韓", 새古墳壁畫공개	『朝鮮日報』	1972.10.05
南北學者 見解대립	『東亜日報』	1972.10.05
"다까마쓰壁畫는 高句麗 技法' 日아스까村現場서 金元龍박사와 緊急對談	『東亜日報』	1972.10.05
平南 江西서발굴 高松갓과흡사	『京鄉新聞』	1972.10.05
5世紀때 고분 壁畫 公開	『朝鮮日報』	1972.10.05
韓國·北韓·日學者 공동TV좌담회 "高句麗영향顯著"	『東亜日報』	1972.10.05
칼러寫眞등 45點「從者데린 女人像」등 北韓, 새古墳壁畫공개	『京鄉新聞』	1972.10.05

タイトル	新聞名	日付
平南 江西서발굴 高松것과 흡사	『京鄉新聞』	1972.10.05
高松壁畫에 南北異見 "高句麗·百濟·新羅거쳐" 韓國 "高句麗의 영향만 받아" 北韓	『京鄉新聞』	1972.10.05
日本서만난 南北學者	『京鄉新聞』	1972.10.05
다까마쓰고분 調査結果 밭표 韓國學者 "東亞文化의 複合製品"	『東亞日報』	1972.10.06
金錫亨·日本人學者「三韓三國分國說」托론	『東亞日報』	1972.10.06
新羅統一 후 8세紀初畫法 築造使用 등 高句麗의 영향	『朝鮮日報』	1972.10.06
北韓서 발굴한 「古墳壁畫」 1500年前의 榮華……高句麗人	『朝鮮日報』	1972.10.06
日 다까마쓰古墳 有感	『朝鮮日報』	1972.10.06
다까마쓰고분의 総合調査	『東亞日報』	1972.10.06
高句麗영향받은汎亞細亞風	『京鄉新聞』	1972.10.06
南北학술資料 교환했으면……	『京鄉新聞』	1972.10.06
萬物相	『朝鮮日報』	1972.10.07
"日다까마쓰壁畫는 鮮明한 極彩色"	『東亞日報』	1972.10.07
새 韓日關係史 定立에 轉機를	『朝鮮日報』	1972.10.10
「日帝의 歪曲」 바로잡아야 天皇 一族은 韓國系인듯	『朝鮮日報』	1972.10.10
飛鳥文化는 高句麗영향 확신	『朝鮮日報』	1972.10.10
韓半島 文化의 總和바탕	『朝鮮日報』	1972.10.10
高松塚학술조사 간담회서 南北學者들 再會	『京鄉新聞』	1972.10.11
金載元박사등귀국 高松古墳조사끝내	『朝鮮日報』	1972.10.12
高句麗영향·中國·土着 日本등 세가지 文化複合體	『京鄉新聞』	1972.10.12
"國際樣式化한 高句麗 壁畫"	『東亞日報』	1972.10.12
「主體思想者」들과의 對話	『東亞日報』	1972.10.12
高松塚調査 帰國紙上報告	『朝鮮日報』	1972.10.15
被葬者는 고구려 王子	『朝鮮日報』	1972.10.15
古代 韓日관계 밝힐 可能性 高松 古墳조사단이 얻은 결론	『京鄉新聞』	1972.10.16
다까마쓰고분調査團귀국 會見 "南北見解같으나 年代등 差異"	『東亞日報』	1972.10.16
"훌륭한 亞洲文化繼承者" 朴鍾和 예술원장 講演要旨	『京鄉新聞』	1972.10.18
「다까마쓰」 고분 紀念우표 發行키로	『東亞日報』	1972.10.20
日 교수 주장 다까마쓰총 주인공 身長 一六〇cm남자	『東亞日報』	1972.10.28
다까마쓰塚주인공 키163cm의男子	『朝鮮日報』	1972.10.31
高松古墳의 유골 40代로 감정	『京鄉新聞』	1972.11.02
被葬者는 40代	『朝鮮日報』	1972.11.02
韓-日 벽화古墳	『朝鮮日報』	1972.11.08
餘滴	『京鄉新聞』	1972.11.15
高入試준비 總整理百科 (7) 국사	『京鄉新聞』	1972.11.21
"古代史 研究姿勢 당당해야" 日學者 내왕서 드리난 問題點	『東亞日報』	1972.11.24
日아스카村長등九명 부여와結緣차韓國에	『東亞日報』	1972.11.25
文化財 쏟아진 發掘……國寶반도 4 點	『朝鮮日報』	1972.12.26
文化財관심높인'72年=國內外서의 遺跡·遺物 연속發見계기	『東亞日報』	1972.12.29
※「NAVER NEWS LIBRARY」にて「高松」「다까마쓰」で検索した結果を内容確認の上で整理。		

民族が優越である」という先入観を持って韓日間の古代史関係を把握しようとする傾向ですね。帝国主義時代の昔へ帰っているように感じた」¹⁴という発言を載せ、または、自省を求める日本の新聞記事などを引用して、「戦前の「任那日本府説」（韓国南部に日本植民地であった任那があったという）を立証するために新羅の古墳をむやみに掘り返した「日本の一考古学の影をここで見えるようだ」」¹⁵と述べたことを伝え、日本学界が真実を認めようとしていないと報道した。

このような記事は、あたかも韓国学者たちは高句麗の影響を認めたくない日本人学者の肩を持っているかのように解釈される余地を与える。そのためか、総合調査会に参加した金元龍は『朝鮮日報』への寄稿文に「一部新聞では南北学者が互いに意見が大きく対立したように報道したり、また、我らが「高松」塚が高句麗ではなく、日本のものであると話したように報道したりしたが、根本が高句麗系という点では南北が共通的であって、唯、力点の位置だけに違いがあったのみであるというべきである」¹⁶とまで話している。

なぜ新聞では「高句麗」の影響というものを重要に取り扱ったのであろうか。それは、「高句麗」の影響を受けたということが、「韓国系」「民族」「南北」というキーワードと緊密に繋がり、7・4南北共同声明で唱えた「途絶えた民族的連携を回復」¹⁷することと絡んで、総合調査会への南北学者参加を「民族」という目線から考える社会的認識が醸し出されたためと考えられる。

III 「高松塚古墳総合学術調査会」の概要と当時の南北韓関係

1 「高松塚古墳総合学術調査会」の開催経緯と概要

1972年3月、権原考古学研究所によって行われた発掘調査で、高松塚古墳の石室内に壁画があることが確認されると、即刻に日本内外のメディア上に報道され、多くの関心が寄せられた。文化庁は6月17日に同古墳を史跡に指定し、6月末になると同古墳の「歴史的、芸術的重要性にかんがみ、また国民の期待と関心にこたえるため、なるべく早い機会に学会各方面の代表的メンバーの参加を仰いで学術調査を行う」¹⁸必要があると考え、「高松塚古墳総合学術調査会」を発足させた。総合調査会は、文化庁の委託をうけて原田叔人を会長として、美術史学・歴史学・考古学・自然科学の各分野の専門家48名で構成され、1972年8月21日に発足し、同日第一回の調査会議を開いたことからはじまった。この第一調査会議において「現地調査を9月30日から10月10日までとする」ことや、調査方法は「壁画については現状記録・比較考証・赤外線写真・顕微鏡写真・顔料分析・そのほかについて、副葬品については現状記録・比較考証・その他について行なうこと」、また、「中国、南北両朝鮮およびフランスから関係の専門家を招請すること」などが決定された¹⁹。

表2 総合調査会に参加した南北韓学者

国 種	名 前	当 時 職 業
大韓民国	金載元	東亜文化研究委員会委員長
	金元龍	ソウル大学教授
	崔淳雨	国立中央博物館学芸研究室長
	李基白	西江大学教授
朝鮮民主主義人民共和国	金錫享	社会科学院歴史研究所長
	朱榮憲	社会科学院考古学研究所副所長
	金鉄浩	朝鮮歴史博物館学術員
	金石俊	金日成総合大学教授

※「高松塚古墳壁画調査報告書」『高松塚古墳壁画』(1973. 3) 3~4頁の「高松塚古墳総合学術調査招請外国人学者一覧」より。

外国の専門家を招請しようとした理由は、高松塚古墳が「朝鮮および大陸文化の影響下に成立したものと推定され」とこと、「その保存法についての参考意見を得るため」であったという。ところが、中国は参加を拒んだため、来日した学者は大韓民国4名、朝鮮民主主義人民共和国4名、フランス3名を合わせて11名の学者であった²⁰。〈表2〉は当時総合調査会に招請され、参加した南北韓学者の名前と当時の職業を整理したリストである。

現地調査の流れは次の通りであった。9月25日には本格的な調査が始まる前に、慰靈祭と埋め戻した部分の発掘を開始し、現地調査本部を設置した。同月30日には石室内外の保存科学的な調査や測定、確認などを行い、4月の仮閉鎖後、異常がないのかを確認した。そして、10月1日に濱田隆、有賀祥隆、松下隆章、藪内清の4名が第一回入室調査をした。その二日後の3日には、第2回の入室調査及び現地視察が行われ、亀田孜他4名と現地視察員として関西在住委員と関東在住委員が入室した。4日になると、南北韓の学者たちが訪問し、午前中は韓国の学者が、午後には北韓の学者が入室調査をした。午前10時から午後3時まで入室調査者からの報告に基づいて討論し、同日の午後3時半からは北韓学者が持ってきた映画などの資料を見て、説明を聞いた。午後7時からの文化庁長官招待レセプションでは、南北韓代表が「握手をかわし、満場の拍手をあびた」という。翌日には、日本人学者と南北韓学者との意見交換があったが、午前は韓国学者と、午後は北韓学者と行われた。6日には4・5日に提議された疑問点を検討すべく、文化庁調査官の鈴木友也や東京芸術大学助教授であった平山郁夫などの実務者及び研究者が入室調査した。8・9日には原寸大写真、赤外線写真の撮影があった。その翌日にはフランス学者たちが入室して保存科学の立場から調査した後、保存上の処理を行った。11・12日には古墳の開口部を埋め戻し、入室調査を終了した²¹。

2 分断以後から1960年代までの南北韓関係

高松塚古墳壁画の発見が当時の南北韓に与えた影響を論じるために、まず、当時の南北韓関係の政治的地形について概観する必要がある。1953年7月の休戦による分断以降、1960年代末まで、南北韓は公式的な接触をせず、互いに体制競争し、敵対していた。時々、北韓が韓国政府に手を差し伸べる姿勢を取ることがあったが、それは米軍の撤収と政権の退陣を前提条件にしてからであった。このような状態は、1971年初半まで続いたが、1971年9月に分断以降、最初の正式な接触として南北赤十字第一次予備会談が板門店で開かれた²²。この会談が開催できた理由としては、何よりも、アメリカが1969年以降「アメリカの介入縮小、同盟国の自主的防衛能力の向上」を基調としたガムドクトリンに基づく新しい外交政策を推進し、共産圏との関係改善を図ったことで冷戦の緩和という国際政治上的情勢変化があったこと²³があげられる。また、韓国側の場合、当時の朴正熙政権が1970年の駐韓米軍の撤収と北韓の軍事冒険主義などの安保危機から逃れ、国内の経済状況悪化から脱出する目的があったという²⁴。また、北韓の場合も、韓国から駐韓米軍を撤収させるとともに、国家予算支出額の30%を上回る国防費を減らし、経済部門に予算を転用したいという欲望が相まってのことと評価されている²⁵。

この南北赤十字第一次予備会談は、1971年8月12日に大韓赤十字社が南北韓離散家族〔韓国戦争と分断によって別れた家族を意味〕を探すために南北赤十字会談を提議したことからはじまって、1973年7月13日まで合わせて25次の予備会談と、7次の本会談が行われた。しかし、北韓が韓国政府に対して政治的要求を一貫して行い、1973年8月に第8次会談の前に、北韓が中断を宣言したことで、実質的な実を得ることはできない状態で終わった²⁶。

このように会談自体は失敗に終わっても、その過程において出され、それからの南北関係における重要な指標になったのが、1972年の7・4南北共同声明である。7・4南北共同声明は、公式的な会談によるものではなく、1972年5～6月に当時、中央情報部長であった李厚洛と北韓の内閣第二副首相であった朴成哲との相互秘密訪問の結果であった²⁷。1972年7月4日にソウルと平壤で同時に発表された共同声明の内容は、「平和統一」と「自主統一」を基調としたものであり、「祖国統一」は、「外勢に依存したり、外勢の干渉をうけたりせずに、自主的に」、「武力行使によらず、平和的方法で」、「思想と理念、制度の差異を乗り越えて、まず、一つの民族として民族的大団結を企てて」からするものとして規定した²⁸。そのため、互いの緊張を緩和して信頼する雰囲気を醸成するため、互いに誹謗中傷せずに、武装挑発をやめ、不意に軍事的衝突事件を起こさないために積極的な措置をすることに合意した。さらに、途絶えた民族的連携を回復して、互いの理解を増進させ、自主的平和統一を促進させるため、南北間で多方面における諸般交流を実施すること

に合意した²⁹。

この共同声明に従って南北韓は3次にわたる会議を通じて「南北調節委員会運営及び運営に関する合意書」を作成して、72年11月30日には南北調節委員会が正式に発足する。この委員会は73年6月まで3回にわたりて全体会議を開いた³⁰。しかし、73年6月23日に韓国の朴正熙が出した「6.23宣言」が、その内容において、「南北間の相互内政不干渉と相互不可侵」・「北韓の国際機構参与不反対」など、北韓の政治実体を認定し、分断を暫定的に合法化することを明示したため³¹、北韓政府はそれを猛非難し、8月28日には「平壤放送」を通じて南北対話の中止する声明を発表するに至った。

この南北赤十字談話や7.4共同声明の意義については、72年10月朴正熙が統一時代に備えるという理由で、自らの永久執権と統治権強化のために行なったいわゆる「10月維新」が宣布され、同年12月金日成の独裁を保障する内容の社会主義憲法が通過した北韓の情勢³²を考慮すれば、南北とも権力者の支持基盤を強化する方向で利用されたと評価されること³³がある。また、相互的信頼関係を築くこともできなく、体制競争過程で一時的に現れた「断続的」対話であったという評価³⁴もある。その一方、南北が共に交渉に挑んで本格的関係を築くようになった画期的な出来事であったという評価³⁵もある。高松塚古墳総合学術調査における南北学者間の交流を検討するためには、このような当時の韓半島を取り巻く情勢を念頭に置く必要がある。

IV 総合調査会への南北学者参加に対する報道記事と「民族」

1 「一本の歴史」を共有する「民族」への期待と失望

72年8月30日に『京郷新聞』に載った「文化」³⁶という記事をみると、「南北」の学術が「民族」文化遺産に繋がり、また、「高松塚古墳」が「韓国」に結び付けられる様子が鮮やかに現れる。この記事は、まず「南北の学術は民族文化遺産の開発という共同目標を帶び」ているが、「学問の方法論が大きく違うため、問題」があると、南北間学術交流の難しさを指摘する。そして、ソウル大大学院長であった李崇寧教授の言葉を引用して「政治性を排除した次元で各種学術及び文化関係資料の交換をはじめ、段階的研究方案を模索しなければならない」という見解を提示する。この「段階的研究方案」として、まず、「古典的な文化資料の交換を通じて、共通的民族意識を高め」ること、その後、「研究業績を通じて北韓の学問水準を検討」し、「研究発表と共同研究段階まで進展させる」ことが適した手順であろうと述べられている。そこに「間島をはじめ、白頭山・鴨綠江などの国境線に関する共同研究」も望ましいが、今は時期尚早であり、その前に、容易にできる「民族文化の優越性を自慢できるような各種遺物及び文化遺産と韓国関係研究の基礎史料を探

る」ことをしようと主張する。また、「考古学関係発掘遺物の図録を交換し、東洋文化圏で韓国文化の独自性と優秀性を一層際立た」ることで、「隣国の日本文化の源流が韓国であるという事実を再認識させる」こともできると論じている。「日本文化の源流が韓国であるという事実を再認識」が必要な理由は、その後に続く「最近日本は新しい文化史観を樹立しようと必死になっていて、「高松」塚古墳壁画の源流をはっきりと韓国とは明かしていない成り行き」になっているという文章から示されている。その上、10月の総合調査会のことを「この問題で開かれる国際学術会議」と説明し、「南北韓代表の協調問題がより〔強く〕要請されていて、まずは学界の関心が集中されている」と、総合調査会における南北韓の協調への期待を表している。しかし、北韓は「唯物史觀一辺倒」の歴史觀に基づき、また、「基礎史料などの資料貧困」が甚だしく、「我らよりよっぽど劣っている」状態であると韓国学会の優越性を際立たせている。最後の「(前略) 従って政府と学界は「民族文化」開発のため、現在の学術院のような機関を改編し、段階的方案を体系的に研究させないといけない」という結言に至っては、上記のすべてが「「民族文化」開発」という目標に落ち着いていた。

以上を通じて次のようなことが読み取れる。まず、来る10月の総合調査会に対する韓国社会における関心が高まっていたこと、その理由は「南北韓代表の協調」を通じて、「隣国の日本文化の源流が韓国であるという事実を再認識させる」ことが期待されたためであることが分かる。さらに、「政治性を排除した次元で各種学術及び文化関係資料の交換」と言いながら、南北間の学術交流の目標を「民族文化の優越性を自慢できるような各種遺物及び文化遺産と韓国関係研究の基礎史料を探る」と想定していることが見て取れる。

このような思考は総合調査会の最中であった10月4日に『朝鮮日報』に載った「萬物相」³⁷という記事からも確認できる。この記事は、北韓との公式会談という解放後、初めての出来事の前に、同じ歴史を共有する南北の今に対する考え方を述べたコラムである。このコラムによると南北は「一本の歴史」を共有しているものの、「あの唯物史觀とやらいう怪説によって、二本に別れて別々に記録されているかも知れない」という憂いをもって、北韓が「我らの子供と若者」にいかなる韓国史を教えているかを憂慮する。そして、当時総合調査会に参加する南北の学者たちについて、次のように述べている。

▼今も高松古墳学術調査には韓国と北韓の学者一いや、韓民族の学者たちが一緒に出掛けている。それは、一つである我が文化が日本に伝來したものであるためでしょう。考えは前に漕ぎ行く。統一が来る前であっても南北の史学者が一堂に会して、民族的良心で一本の韓国史を編むことはできないだろうか…といえば性急な幻と言えるだろうか³⁸。

すなわち、南北は「韓民族」であり、我らの「一つである我が文化が日本に伝來した」ということである。そして、我らが幻だと言われても南北韓学者の交流に望んでいるものは「民族的良心」に基づいた「一本の韓国史を編む」ことであると読者に話しかけている。もちろん、これは社説ではなくてコラムであるため、この記事が当時、朝鮮日報社を代弁するものとは言えない。しかし、このコラムは下段に位置していたとはいえ、新聞1面に載っていたことからみて、このような考え方が韓国社会に存在していたことは確実である。その上、当時の韓国社会における『朝鮮日報』の位相³⁹を考えれば、このコラムは多くの読者に響いたと考えられる。

しかし、このような「韓民族」である南北の学術交流によって「一本の韓国史を編む」ことを期待する姿勢は、古墳における南北学者間に意見差があり、4日夜のNHK座談会における北韓学者の「政治宣言」が行われた後、急変する。南北学者の意見差については、特に北韓学者が持参した江西古墳の壁画写真の報道と共に論じられた。ここで意見差というのは、次の通りである。まず、北韓側は「北韓江西郡修山里古墳」の写真と「19枚の天然色写真と約一時間上映できる記録映画」の資料を提供し⁴⁰、「修山里古墳は「高松」古墳が発掘された直後に発掘されたが、5世紀ごろに築造されたものと考えられることから、7～8世紀に作られたものとみられる「高松」古墳は高句麗の影響を直接にうけたものに見えると主張」⁴¹した。これに対して、韓国側は高松塚古墳が韓半島の影響を受けてはいるが、「東「アジア」文化の様々な要素が複合されたもの」⁴²であり、三国時代の文化交流を通じて高句麗から百濟・新羅へ流れてきて、そこで新しい文化を形成し、「奈良」へ伝來したことではないかという慎重論を張った⁴³。

NHK座談会の出来事については、北韓の朱栄憲が壁画の構造や絵法・石室の様式などが高句麗のものそのままであると主張し、「数回にわたって修山里をはじめ、北韓で発掘された高句麗壁画の資料を見せたいと提議したが司会者から拒否」⁴⁴されたことが新聞で報道された。また、「北韓中央歴史博物館学術員という金鐵浩が、座談会が終わってから、まだ話したいことがあると発言権を得ると、「平和統一」云々、「米帝の民族文化抹殺政策に抵抗せよ」などの、政治宣伝を繰り返し、主催側を困惑させた」⁴⁵ということも報道された。

このような意見差や北韓学者の姿勢について、『朝鮮日報』はまた「万物相」⁴⁶を通じて「歎息」し、「そのようにしてという指令を受けたためだろう」と言いながらも、「少なくとも南北考古学者の交流だけはどんな学術文化部門のそれより先行できると考える我らの常識を修正させる」出来事であったと批判している。また、北韓学者たちが高句麗との直結を言い張ることについて「学説よりはどこか政治の色が濃く表れる。もしかしたら、彼らは高句麗のイメージと北韓社会をオーバーラップさせようと目論んでいるのかもしれな

い」が、「脱北してきた某学者曰く「フン、高句麗の子孫の魂は私のように脱北してきたことも知らずに、もう、蕃人のようなやつらが」と愚痴」ったことを取り上げて、北韓側が唱える高句麗の子孫としての正当性を否定した。続いて、もう高句麗も新羅、百濟も存在しないのにそれらの国と直結させようとする考えは卑しい所見であると辛辣に批判し、北韓がどうしても高句麗を掲げたいなら、中国に満州をよこせといえるなら認定できると皮肉を浴びせてた。最後には「この民族〔韓民族〕が何の悪い罪を犯して、いつまでもこの苦楚を蒙らなければならないのか。神よ、思いやって大陸棚から石油でもどっさりわき上がるようにしてください」と嘆いた。

この記事の興味深い点は、まず、北韓側が「指令を受けた」だろうと同情をしめしていることである。実際に、韓国も1970年代が朴正熙独裁期であって、言論に対する検閲が厳しい状況⁴⁷であったことを考えれば、北韓側に示している同情は鏡に映った自分を同情することのように考えられる。また、北韓が高松塚に対する「高句麗」との直結を言い張っていたことについては、「学説よりはどこか政治の色が濃く」、「高句麗のイメージと北韓社会をオーバーラップさせようと目論んでいる」と鋭く見抜いているにも関わらず、韓国言論における「高句麗」「韓国系」との連結の主張については全く触れていない。同時にこの記事では、我が「高句麗」の正当な後継者は韓国であるという危機感もうかがえる。

このような北韓側に対する批判的な姿勢は『東亜日報』の「「主体思想者」たちとの対話」⁴⁸という記事からもうかがえる。当時、東亜日報社の論説委員であった孫世一が書いたこの記事は、初めての学術領域における南北間の対話の様子を伝え、また、その限界を論じたものである。ここで、孫は、南北韓の「我が国」学者たちが日本の古墳調査へ同時参加した今回の出来事は、「南北韓の学者間に「対話」の機会」をもたらしたという意義があると評価する。しかし、その「対話」の実際の様子について、北韓の学者たちは「南韓の歴史学界に対して関心を表明さえしていなかった」といい、修山里古墳について韓国の学者たちは関心を表明したのに、北韓の学者たちは百濟の武寧王陵などに全く言及もしていないと述べている。

また、北韓の学者たちは「考古学を通じた宣伝」のために来ており、「対話」ができぬ状態であったと批判し、その証拠としてTV座談会で金石俊が最後に金日成の礼賛からはじめ、「米帝国主義の民族文化抹殺政策」を批判する演説をしたことを挙げている。また、5日のNHK生放送の際にも、司会者が政治的発言をしないようにと言ったのにも関わらず、「“祖国の平和的統一のために南北朝鮮の会談が進められているこの時々”」したなどの言動を、韓国学者のみならず多くの関係者が不愉快に考えることを北韓学者が知らなかつたわけがないと、「狂信的な宗教人たちがいやだという人に強いて伝道ビラを配る」ようなものであると批判した。さらに、「我らが、特に越南〔脱北〕した同胞たちが

忘れられないあの「残してきた山河」はこのような「主体思想」者たちの「我が国」になってしまった。一千三百万北韓同胞が皆そうではないと信じたいが、少なくともそのような人々が考古学までも支配しているという事実が今回「高松」塚調査で確認できたわけである」と、南北学者間の「対話」は噛み合わず、北韓側の「主体思想」への盲信を確認したのみであったと限界を指摘する。

2 鏡像の民族主義という異床同夢

なぜ、勝手に「民族」の「一本の歴史」を期待して、また、失望し、怒るのであろうか。上記のような新聞上の言説は、当時、朴正熙が独裁と暴力的な成長主義政策に国民を動員するため掲げていた民族主義⁴⁹へ新聞社が積極的に加担していたことを露わにする。朴正熙は集権当初、『我が民族の進むべき道』を記し、1971年には『民族の底力』、78年には『民族中興の道』を著するなど、民族を前面に出した文章を書き、また、政策的に李舜臣や世宗大王を宣揚することによって、「近代化に向ける国民の動員に民族文化の象徴を有効に活用」⁵⁰しようとした。朴正熙の民族史観は、韓国の歴史を「事大」の歴史、「分裂」の歴史、「他律」の歴史、「模倣」の歴史であったとみて⁵¹、「当代の韓国社会の混乱に対するすべての責任を以前の腐敗した政権に擦り付けて、過去の三国時代に至る歴史を通じて問題の深刻性を誇張する」⁵²ものであった。しかし、一方では「反共と近代化という自ら設定した制限された目標」⁵³のためには、李舜臣や世宗大王は民族の守護者であり、民族文化の復興の象徴として利用し、「高句麗の高き気骨と花郎の英勇な精神」や、「新羅の燐爛とした文化」⁵⁴は継承すべき文化遺産として位置づけた。

このように、当時の新聞に表出された「高句麗」との関係の強調、韓半島の古代史を「韓国」と連結させて論じようとする姿勢、また、「高句麗」と高松塚古墳を直接に繋げようとする北韓学者に対する危機感や反感の表明は、このような朴正熙の政治基調に当時の新聞社が意を迎合していたことを現わす。そして、このような記事を通じて、当時の韓国社会における北韓に対する認識が垣間見えるのである。すなわち、北韓は同じ「韓民族」であるが、「民族」としての正当性は「主体思想」を唱えるあの共産主義者たちではなく、「我ら」にあるという認識構造がうかがえる。

一方、同時期、北韓の政治基調も似たような状態であった。北韓は政権が成り立った時から、政権の正統性を固めるため、文化遺産の「民族的な要素」を強調し⁵⁵、文化遺産を活用して宣伝及び高揚を通じて「日帝」と「米帝」に当たる「守護者」としての国家アイデンティティを形成しようとした⁵⁶。韓国戦争直後、北韓の「民族」概念は「マルクス＝レニン主義」に基づいてスターリンの「民族」理論を借りて⁵⁷、「民族とは社会発展の一定な段階において言語、地域、経済、生活及び文化の共通性によって歴史的形成された

人々の集団』⁵⁸と定義していた。しかし、60年代中葉になると、南北韓間の経済格差が大きくなり、「経済」という共通性を持つ「民族」という定義は揺れはじめ、「一つの朝鮮」政策を裏付けるための新要素を発見しなければならなかつた⁵⁹。その新要素が「血統の共通」であった⁶⁰。そして、60年代後半から登場し、70年代に本格化された主体思想の体系化と中国・ソ連との対立という問題も、「血統」という要素が発見されなければならなかつた理由であった⁶¹。

その上、北韓は「民族文化遺産」の政策において、高句麗史に重点を置いていた。それは植民地期以降、「偉大なる民族」を形成しようとした時期から始まって、主体思想の確立を進めた60～70年代にはより強化された⁶²。その高句麗史の叙述において、百濟・新羅及び日本に対する影響を強調することも、北韓の「民族文化遺産」政策の特徴であり、今日までも続く伝統ともいえる⁶³。ところで、考古学研究において60年代中半までは北韓でも、遺跡・遺物に対する批判的分析が可能な状態であったが、60年代後半からは遺跡・遺物の調査や解釈において主体史観に基づいた方法論が強調され、「主体の考古学」になったと評価されている⁶⁴。

このような北韓の状況を考慮すると、上記のような発言、すなわち、「高松塚古墳」は高句麗の影響を直接に受けたという話や、生放送で「米帝」を打倒しようとする宣伝が行われたのは当然の成り行きであったと考えられる。残念ながら、当時北韓の新聞記者を確認することはできなかった。しかし、1977年に北韓の社会科学院考古学研究所が編纂した『朝鮮考古学概要』の第五節の「古墳」の中、「(3) 高句麗古墳壁画の特性とその歴史的地位」の叙述を見ると、当時北韓側の考えが読み取れる。ここでは、「高句麗古墳の壁画は過去の我が歴史で燐然とする光を放つのみならず、世界文化史において輝く位置を占めている」と、高句麗古墳の壁画は「我が歴史」のみならず、「世界文化史」でも特別なものであると褒めたたえている⁶⁵。そして、同節の結論において、その「世界文化史において輝く位置」というのは、「すでに紀元前1000年期後半から朝鮮文化の大きな影響を受けた日本では三国時期に三国文化の影響を大きく受け《古墳文化》を形成・発展させた」ことで、その実例の一つとして「高松塚古墳の壁画が高句麗古墳壁画の様式と画風の今まで描かれていた点」を挙げている⁶⁶。さらに「このように三国文化は、我が国のその後の文化発展に対しても、当時隣国の文化発展に対しても大きな影響を与え、多く役立った」と評価し、三国文化が「東方文化の花を咲かせ、世界文化宝庫を豊かにするに大きく貢献した」⁶⁷とまで述べている。この文章の中では「三国文化」と述べられているが、「三国文化」は「高句麗文化の要素が基本的なものになっていた」⁶⁸という前提からなる叙述であったことを考えれば、「東方文化の花を咲かせ、世界文化宝庫を豊かにするに大きく貢献した」ものは基本的に高句麗文化を示す。

一方、こうように過去の文化に対する評価を「韓国」へつなげる態度は韓国社会からも確認できる。以下は、第一回アジア芸術シンポジウムで朴鍾和芸術院院長の「立派な亞洲文化継承を」という講演内容を報道した記事の一部分である。この講演で朴は文化交流が各国の芸術発展に与えた良い影響について次のように述べたという。

一千三百年前、高句麗・百濟・新羅の芸術文化は、海外の日本へ流れて行き、日本の文化を輝かせました。去る1972年3月に日本「奈良県」明日香村にある「高松」の古い墓から新しく発見された高句麗風の百濟壁画は日本学会が一百年以來の大発見と言って世界の学者から大きな関心が寄せられました。それのみならず、韓国古代芸術に対してもさらに驚歎と賛辞が送られてきました。文化交流はこのように千年二千年後までいい影響を国家と国家、民族と民族の間に与えられるのです。

ここで「高句麗・百濟・新羅の芸術文化」は日本へ流れて「日本の文化を輝かせ」、また、それは、「韓国古代芸術」になるわけである。

以上を総合すると、当時韓国の言論は北韓の姿勢を批判していたが、それは、自分が映される鏡に付いた埃に怒るようなものであって、「民族」に対する南北韓の考えは異床同夢のようなものであったと評価できる。このような状態下で、南北韓の学術交流に対する期待はあっても、政治と切り離して学術を論じることはできなかったことは当然の展開であつただろう。

V 結びにかえて

1973年6月まで続いた南北調節委員会の会議の中で、各方面における南北韓交流の期待を表明する報道記事は絶えず続く。その中で、考古学は、金載元などの考古学者たちによって「日本高松塚古墳を見回した際に、南北考古学者たちの接触はすでに成し遂げられた」分野であり、「最も非敏感な分野」であるため、交流しやすい分野として論じられる⁶⁹。その方法については、まだ共同研究までは不要で、まずは、資料交換で十分という立場もあれば、「南北で発掘した文化財の中で、歴史的に重要なものを共同研究しようとする努力は、南北間の歴史的一体性を再確認させて、統一を志向する民族の努力に符合する」として共同研究を積極的に取り組むことを主張する立場まで、意見差があった⁷⁰。しかし、ここにおいても「南北間の歴史的一体性」、「民族」という夢は消え残っているのである。

本稿では、「高松塚古墳壁画」の発見と、総合調査会への南北韓学者参加に対する報道記事を通じて、総合調査会への南北韓学者参加というものが韓国社会には如何なる意義を

もっていたのか、また、少ない資料からではあるが同じ出来事が北韓には如何に受け止められたのかを探った。しかし、研究を進める中で、もっと根本的な疑問が次々とわき上がって来た。南北韓でいう「民族」は同じものを指すのであろうか。その前に、「韓国」「朝鮮」の「民族」はいつから存在して、いつまで存在するものであろうか。また、そもそも歴史・考古学に関する研究や交流から全く「政治」を排除することができるのだろうか。

南北韓でいう「民族」が同じものであろうがあるまいが、両方とも「高松塚古墳壁画」を「記憶できない遙か遠い過去から無限の未来へ繋がる集団的な生き」⁷¹ものとして「民族」の輝く過去として受け入れ、人民もしくは国民に共同体という認識を覚えさせ、政治へ動員するという夢を託していたことは確かである。もちろん、その夢見る床である政治体系が異なったため、特に韓国では北韓の「民族」としての正当性を認めない姿勢を見せた。上述した通りに、1973年以後、北韓の対話拒否によって南北韓間の対話は途絶え、考古学における学術交流の話も消え去ったように見えるが、南北韓の交流を論ずる時は「民族としての正統性と文化的な主体性」⁷²を確認できるものとして考古学が引き出されるよう⁷³になる。しかし、70年代を通じて北韓は、このような韓国側の声に無反応であった。

1972年の高松塚古墳総合学術調査における南北韓の考古学者交流は、分断以後の初めての学術接触であり、互いの考古学という学問の近況を確認できた場という意義のある出来事であった。しかし、その実際においては、南北韓は、各自の民族主義から離れることができず、学術内容について自由に論じることができない状況下で行われたという限界があった。そして、それは韓国の新聞記事を通じて互いに夢見ていた「民族」の「一本の歴史」の限界であったともいえよう。

註

- 1 高松塚古墳総合学術調査会編 1973 「高松塚古墳壁画調査報告書」『高松塚古墳壁画』高松塚古墳総合学術調査会 p. 1。
- 2 森岡秀人と網干善教の著書によると、末永雅雄や網干善教は遺跡に残っている壁画を見つめたのは、個人である当事者が遺跡・遺物を独占するごとき「発見」ではなく、多くの人々の協同事業の産物であり、万人が確認できるものとして「検出」という言葉を使うべきと論じている。しかし、本稿では韓国の新聞記事を中心に検討を行うため、新聞記事で一般的に使われた「発見」という言葉を用いる。
- 3 森岡秀人・網干善教 1995 『日本の古代遺跡を掘る 6 高松塚古墳—飛鳥人の華麗な世界を映す壁画』 読売新聞社 pp.97-98。
- 4 小川伸彦 2013 「高松塚古墳壁画発見報道の文化社会科学的分析—新聞記事にみる価値とイメージの生成—」『奈良女子大学文学部研究教育年報』 10。
- 5 同上、p.21。
- 6 「日本깊숙히 파고든 七色의極彩 高句麗의 墓 古墳 壁畫」『東亜日報』 1972.03.29。

- 7 この井上氏は、『奈良朝仏教史の研究』などを著した古代史学者の井上薰のこと、1963年から大阪大学の教授を務めながら、樋原考古学研究所の研究員を委嘱されていた。奈良大学文学部文化財学科 1987「井上薰博士 履歴及び業績目録」『文化財学報 (Bunkazai gakuho, Bulletin of the study of cultural properties)』5 p. 2。「構造・塗料・分層・書工の 人的関係が 立証 朝日新聞報道」『東亜日報』1972.05.27。
- 8 「"高句麗文化가 꽂과운 小宇宙" 日本人学者들이 본 나라縣 고분壁画」『東亜日報』1972.04.03。
- 9 「新羅統一 후 8세기初畫法 築造使用 등 高句麗의 영향」『朝鮮日報』1972.10.06。
- 10 「高句麗영향·中國·土着 日本등 세가지 文化複合體」『京鄉新聞』1972.10.12。
- 11 同上。
- 12 「다까마쓰고분 調査結果 발표 韓國學者 "東亞文化의 複合製品"」『東亜日報』1972.10.06。
- 13 「스케치 日다까마쓰총 고분발굴 계기로 韓國文化에關心」『東亜日報』1972.05.24; 「韓國 古文化에 놀라운關心」金元龍박사가 말하는 日本 考古學界」『朝鮮日報』1972.07.12; 「古代日本文化 源流는 韓國」『京鄉新聞』1972.07.19; 「『다까마쓰』 老源流 찾으리온 日아보시教授" 棺의 장식무늬와 慶州의 옛 기와 무늬가같아 한系列로 심증얻어」『東亜日報』1972.07.19など。
- 14 「"韓國 古文化에 놀라운關心" 金元龍박사가 말하는 日本 考古學界」『朝鮮日報』1972.07.12。
- 15 「스케치 日다까마쓰총 고분발굴 계기로 韓國文化에關心」『東亜日報』1972.05.24。
- 16 「"國際樣式化한 高句麗 壁畫"」『東亜日報』1972.10.12。
- 17 「南北共同聲明 全文」『毎日經濟』1972.07.04。
- 18 前掲註 1 p. 1。
- 19 文化庁文化財保護部 1972「高松塚古墳総合学術調査について」『月刊文化財』110 p.44。
- 20 同上。
- 21 前掲註 1 p. 4、前掲註19 p.45。
- 22 非公式的には1954年のジュネーブ政治会議や1963年にスポーツマン間の接触などがあった。
고양석 2013 「7·4 남북공동성명에서 10·4 선언 채택까지 남북대화 연구 — 역사적 제도주의를 중심으로—」 서울대학교행정대학원 석사학위논문 p.11。
- 23 김계동 2008 「한국의 대북한정책 변화에 대한 이론적 연구」『국방정책연구』79-1 한국국방연구원 pp.38-39。
- 24 고양석2013 p.12。
- 25 고양석2013 p.13。
- 26 고양석2013 p.14。
- 27 김지형 2008 『데탕트와 남북관계』 선인 p.195、고양석2013 p.15から再引用。
- 28 「南北共同聲明 全文」『毎日經濟』1972.07.04。
- 29 同上。
- 30 고양석2013 p.15。
- 31 김형기 2010 『남북관계변천사』 연세대학교출판부 p.78、고양석2013 pp.15-16から再引用。
- 32 김계동2008 p.41。
- 33 심지연 2001 『남북한 통일방안의 전개와 수렴』 돌베개 p.63、고양석2013 p.16から再引用。
- 34 김근식 2008 「남북관계60년과 남북대화：평가와 과제」『북한경제리뷰』10-8 한국개발연구원 p.26。
- 35 김형기2010 pp.68-69、고양석2013 p.17から再引用。
- 36 「文化」『京鄉新聞』1972.08.30。

- 37 「萬物相」『朝鮮日報』1972.10.04。この「萬物相」というコラムは1956年4月1日からはじまり、今日に至るまで続いている。その内容は、当時社会で話題になっている主題を取り上げて、記者を特定せずに自由に「▼」記号の下で箇条書きしたもので構成されている。
- 38 同上。
- 39 朝鮮日報社は、1960年代初頃までは赤字であったが、1964年11月方一榮が会長になってから、「頂上朝鮮日報」を目指して他社の有能な編集記者をスカウトするなど、攻撃的な経営を行い、1965年3月に17万4500万部であった販売部数は同年11月には20万2077万部を記録、79年には100万部を突破、業界のトップになった。1970年2月からはカラー新聞をはじめ、1972年3月には読者が50万を超えたと公式的に報道した。また、1974年2月のアメリカASIという広告及び媒体研究分析機関が韓国新聞購読に関する実施したアンケート調査結果、定期購読者の比率は、朝鮮日報が28.7%で1位であったという。しかし、『朝鮮日報』には朴正熙の1969年の3選改憲や72年10月の維新改憲を褒めたたえる記事が載るなど、方は朴正熙政権を擁護し、軍事独裁に協力することで言論者を成長させたと評価されている。
- 「[조선일보 창간 90주년 특집][격동의 역사와 함께한 조선일보 90년] 방우영, 편집혁신 통해 '정상 조선일보' 탈환」『朝鮮日報』2010.03.05; 「[창간95/FIRST & BEST] 현존 최고 민간 신문 조선일보… 日帝에 강제 폐간 수난, 70年代부터 '부동의 1위'」『朝鮮日報』2015.03.05; 「살아있는 언론권력·밤의 대통령…영욕의 신문인」『ハンギョレ』2016.05.18; 「1993년에야 위대해졌다」『ハンギョレ21』2009.10.21。
- 40 「"北韓", 새古墳壁画공개」『朝鮮日報』1972.10.05。
- 41 「平南 江西서발굴 高松갓과흡사」『京鄉新聞』1972.10.05。
- 42 「다까마쓰고분 調査結果 발표 韓國學者 "東亞文化의 複合製品"」『東亞日報』1972.10.06。
- 43 「南北學者 見解대립」『東亞日報』1972.10.05。
- 44 「다까마쓰 고분 종합調査 本格化」『東亞日報』1972.10.04。
- 45 「韓國・北韓・日學者 공동TV좌담회 "高句麗 영향顯著"」『東亞日報』1972.10.05。
- 46 「萬物相」『朝鮮日報』1972.10.0付。
- 47 朴正熙の5.16クーデター以後、1961年には韓国新聞倫理委員会が設立され、64年には同委員会に審議室が新設され、同室が全国の日刊新聞と通信におけるほぼすべての記事内容を審議及び制裁した。この韓国新聞倫理委員会は民間検閲機構ではあったが、民間検閲機構が国家権力の官制検閲を上回る水準で検閲を実施したことは、朴正熙政権期の特徴であり、このような状況は70年代にも続いた。また、朴正熙政権は、言論の企業的性格を活用して権論発着を誘引する同時に、言論社組織の二元化を助長して内部結束を壊すことで言論の正論性を弱化させる方法で言論統制をおこなった。이봉범 2011 「1960년대 검열체제와 민간검열기구」『대동문화연구』75。
- 48 「「主體思想者」들과의 對話」『東亞日報』1972.10.12。
- 49 최연식 2007 「박정희의·민족 '창조와 동원된 국민통합」『한국정치외교사논총』28-2、이행선 2011 「대중과 민족 개조—박정희, 『우리 민족의 나갈 길』을 중심으로—」『한국문화연구』21など。
- 50 최연식2007 p.63。
- 51 朴正熙 1997 『國家와 革命과 나』 지구총 p.47、前掲註49최연식論文 p.47より再引用。
- 52 이행선2011 p.118。
- 53 최연식2007 p.57。
- 54 대통령공보비서실 1976 『박정희대통령연설문집』2 대한공론사 p.296、최연식2007 p.60よ

- り再引用。
- 55 전영선 1999 「북한의 조선민족제일주의와 민족문예 정책」『통일논총』 17、이준성 2020 「북한의 문화유산 정책 변화와 고구려사—『민족문화유산』을 중심으로—」『高句麗渤海研究』 66 p.222より再引用。
- 56 남보라 2015 「국가건설과정의 북한 문화유산관리 연구 : 1945년 1956년을 중심으로」 북한대학원대학교석사학위논문。
- 57 최선경 · 이우영 2017 「'조선민족' 개념의 형성과 변화」『북한연구학회보』 21-1 p. 6。
- 58 조선로동당출판사 1957 『대중정치용어사전』 p.114、최선경 · 이우영2017より再引用。
- 59 최선경 · 이우영2017 p. 8。
- 60 이준성2020 p.229。
- 61 최선경 · 이우영2017 p. 9。
- 62 이준성2020 p.238。
- 63 同上、p.243。
- 64 特に朝鮮労働党の5次大会があった1970年11月から1980年9月までは、唯一思想大会の強固、主体思想化の実現という目標の下で、平壤を中心とした高句麗歴史、文化の復元研究が中心になった時期であったという。 강현숙 2020 「북한의 고구려 고고학 조사·연구의 성과와 과제」『MUNHWAJAE Korean Journal of Cultural Heritage Studies』 53-1 pp.107-108。
- 65 사회과학원고고학연구소편 1989 『조선고고학개요』 새날 p.243。
- 66 同上、p.258。
- 67 同上。
- 68 同上、p.257。
- 69 「南北交流時代를 연다 무엇을 어떻게 專門가들의 紙上分析 遺物 (유물)—史料 (사료) 연구로 「民族 (민족)」찾아 가장 敏感하지않은 分野—考古学」『朝鮮日報』 1973.01.01。
- 70 同上。
- 71 임지현 김용우編 2005 『대중독재』 2 책세상 p.611、前掲註49이행선論文 p.117より再引用。
- 72 「民族문화 正統性 확인계기」『京鄉新聞』 1976.04.14。
- 73 特に1981年の11.16文化交流提議の時に「同族の同じ歴史、同じ文化を通じて同質性を回復」できるものとして考古学資料の交換や遺物の交換展示が論じられた。「되찾아야 할 民族의 脈…對北韓 古代文物 교류제의…배경과 의의」『朝鮮日報』 1981.11.17 ; 「"民族文化계승에 절실한事業" 11.16提議 各界의견」『毎日經濟』 1981.11.17 ; 「民族史同質性 회복계기로」『京鄉新聞』 1981.11.17など。